

打吹山のイヌ〇〇

家畜になっているイヌの語源はわかっていません。縄文時代の遺跡から埋葬骨が発見され、人と暮らしていたことはわかるのですが、なぜそのように呼ばれるようになったのかは不明です。しかし、人にとって役立つ存在であったはずなのに、他の生物の名称の頭につけられた「イヌ」は、「似て非なるもの」「人にとって役に立たないもの」「劣るもの」の意味で使われています。なかには、即物的に動物の部分形容したイヌノフグリといった使い方もあります。

1. イヌとつく動物

単独でイヌとついた動物は打吹山にいません。「イヌ(犬)」に寄生するという意味で使われたイヌジラミ、イヌノミという昆虫もいますが確認していません。運動にきたイヌから離れたもの、タヌキに寄生しているがいるかもしれません。その他、イヌがつく植物に関わってつけられたイヌビワコバチというような命名はいろいろあります。



イヌビワ雄花囊上の
イヌビワコバチ♀

はるか上空に現れる可能性のあるイヌワシだけが、「イヌ(犬)」以外の意味でつけられている可能性があります。魚類にはイヌゴチというような「似て非なるもの」「劣るもの」を意味する名称がかなりあり、植物と同じ発想の命名がなされたようです。

2. イヌとつく植物

植物には和名の頭にイヌがつくものがたくさんあります。打吹山にあるものだけでも、樹木でイヌエンジュ、イヌザンショウ、イヌシデ、イヌツゲ、イヌビワ、イヌマキなど、草はイヌガラシ、イヌタデ、イヌナズナなど、すべて「劣るもの」という意味のものたちです。



イヌビワ雄花囊



冬に花囊があるのは雄

バラ科のビワにイヌがついたイヌビワは、クワ科でイチジクの仲間です。冬のこの時期、イヌビワは落葉し、ビワは常緑。葉の厚さやイメージは全く違いますが、イチジクを小さくしたイヌビワの実とビワの実は似ています。しかし、イヌビワの雄果囊は食べられませんから、

イヌがついていても納得できます。雌果囊は美味しいのですが、色が黒くビワのイメージではなかったのでしょうか。カラシやタデ、ナズナは、「そのものより劣る」というわかりやすい命名です。

イヌシデは、比較の対象となる本物のシデという樹木がありません。近縁種がシデ類と総称で呼ばれるので、その中のどれかと比較していると思われます。シデとは紙垂のことで、果穂の形が立派な種に比較してのイヌなのでしょう。



イヌシデ果穂



幹肌

その他、植物名にはカラスやスズメがついたり、ネズミノオやウシノヒタイ、トラノオなど動物の部分名称につけたものもあります。しかし、植物名が動物の特徴を表すようなものは、サツマノミダマシ(さつまの実とはハゼの実のこと)というクモしか知りません。このあたりに、人と動植物の関わりの軽重が現れているのではないのでしょうか。